九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

対照の imperfecto

山村, ひろみ
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/6796478

出版情報：言語科学. 32, pp.153-180, 1997-02-26. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

対照の imperfecto*

山村　ひろみ

0. はじめに

スペイン語の直説法単純形には過去に言及するものとして pretérito, imperfectoの二形式がある。この二つの形式の機能的差異に関しては、これまでにも様々な見方が提案されてきたが、その中でも最も広く受け入れられたのは両形式をアスペクトというカテゴリーにおける最小対と見做し、pretérito は完了アスペクト、imperfecto は不完了アスペクトを有するとした見方だったと思われる。しかし、pretérito, imperfectoの実際の用法を観察してみると、この一般に流布した解釈とは相容れないような例が数多く存在することが分かる。そういったいわば特殊な用法の存在は、これまでにも度々指摘されてはいたが、その在り方が当該形式の本質的機能との関わりにおいて論じられることは少なく、それらは多くの場合、その形式の単なる慣習的用法として処理されてきた。本稿は、このような諸用法の中から Porto Dapena(1989)が「対照のimperfecto(imperfecto de contraste)」と呼ぶ imperfectoの一用法を取り上げ、それをimperfecto の持つ本質的機能との関係から新たに考察しようとするものである。

以下、まず第１章では「対照の imperfecto」と呼ばれる用法の一般的解釈を概観し、それがアスペクト的観点からすると何故「特殊」と見做されることになるのかを明らかにする。続く第２章では、その一般的解釈が当該用法の実態を反映したものか否かの検証を行い、その結果、当該用法の解釈には再検討が必要であることを指摘する。そして、第３章では、まず、imperfecto と pretérito の機能的差異を基準時とそれに対する方向という観点から分析する Rojo(1974), 山村(1994, 1996a)の時間関係説を紹介し、次にこの時間関係説の枠組みに従うならば、「対照のimperfecto」という用法は imperfectoの持つ本質的機能を忠実に反映したものと解釈され、アスペクト説の場合のように特殊な用法と解釈されることはないことを示していく。

1. 対照の imperfecto とは何か

この章では、対照の imperfecto と呼ばれる用法がなぜ imperfecto の特殊用法と見做されのかを論じるために、まずpretérito と imperfecto の機能的差異をアスペクト対立とする従来の見方を概観し(1.1.)、次に、「対照の imperfecto」の用法解説と合わせて、アスペクト説を取った際に生じる対照の imperfecto の問題点を指摘していく(1.2.)。

『言語科学』　第32号（1997）P.153～180

1.1. pretérito と imperfecto のアスペクト対立に基づく解釈

pretérito と imperfecto をスペイン語の動詞体系の中でどう位置付けるかについてはこれまでにも色々な見解が提案されてきたが、その中でも特に広く支持されてきたのは、以下の図１に示されるようなアスペクト説であった[1]。

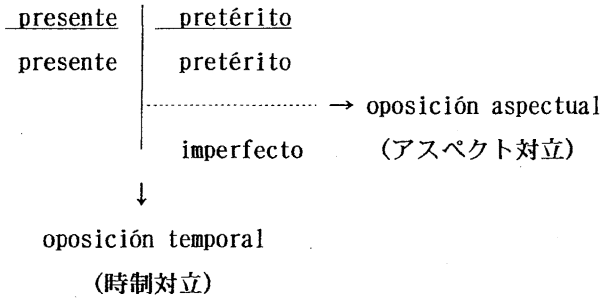

図１

上の図によれば、pretérito と imperfecto はどちらも過去の事態に言及するものと分析されており、その結果、両形式の違いは時制対立以外のもの、つまり、アスペクトというカテゴリーにおける違いと理解されていることになる。このアスペクトに基づく対立についても、その素性の設定の仕方、対立のあり方等をめぐって幾つもの異なる意見が提出されたが、現在、最も一般的なのは、当該二形式を「完了性」という素性の有無をめぐる最小対と見做す考え方だと思われる。この考えに従うならば、pretérito は「完了性」に対して有標で、それは当該事態の発話時以前における不成立から成立への変化、つまり、当該事態の発話時以前における成立の表示と規定することができる[2]。一方、imperfectoは「完了性」に対して無標で、それは対象となる事態の継続性に焦点を当てその事態の開始や終結には言及しないと解釈されている。以上のことは次の RAE (1973:462)のように、pretérito と imperfecto は当該事態の時間的限定性に関して対立を示すという形で言い換えることができる。

“ En los tiempos imperfectos, la atención del que habla se fija en el transcurso o continuidad de la acción, sin que le interesen el comienzo o el fin de la misma. En los perfectos, resalta la delimitación temporal.” (RAE 1973: 462)

(不完了時制では、話者の注目は行為の経過あるいは継続に置かれ、その開始や終結が関心を引くことはない。完了時制の場合には時間的限定性が際立つ。)

この pretérito と imperfecto の時間的限定性に見られる違いを図式化すると図２

のようになる。

● ////////////////////////// ●

開始点　　終結点

図2

pretérito は上図の●が示す開始点あるいは終結点を表示し、imperfecto は///の部分を示す。つまり、前者は、当該事態の開始あるいは終結を表示するという意味において時間的に限定的であり、後者は、当該事態の開始以後・終結以前の状況を示すという点において時間的に非限定的と解釈されていることが分かる。

一方、pretérito と imperfecto の時間的限定性が上とは異なる事象について述べていることがある。以下の Butt & Benjamin (1994)の記述を参照されたい。

“ 14.4.4 Preterite for events ocurring with a finite period
The preterite tense must be used for an event that continued for a finite period of time and then ended. By ‘finite’ is meant a period of time of a specific length, i.e. whose beginning and end are known:(…) .”
(Butt & Benjamin 1994:212)

“ [The imperfect form is used] To indicate states or actions that continued in the past for an unspecified period. It is thus much used for characteristics situations and habitual actions.” (Ibid:214)

上の記述のうち、pretérito で問題となっている特定の期間と事態との関係は、当該形式によって表された事態が telicか atelic かによってその意味するところが違ってくる。pretérito の表す事態が telic な場合、その成立は当該事態が完全に終結した時に初めて達成される終結指向のものであるため、特定期間と言うのは当該事態の開始から終結までに要した時間を指すことになる。一方、pretérito の表す事態が atelicな場合、その成立は当該事態の開始に対応するだけで、その終結が指向されることはない。従って、atelicな事態の特定期間というのは当該事態の開始以後それが有効であった期間を示すことになる[3)]。

他方、imperfecto は不特定の期間継続した状態や行動を示すが、ここで問題となるのは「不特定の期間」が何を指すかである。確かに実際の用法として、1)のように imperfecto が特定の期間を示す数量名詞句と共起することは難しい。

1) María *vivía en Japón dos años. マリアは日本に２年住んでいた。
「住む」の imp. に 日本 2 年

しかし、この例文は mucho tiempo (「長いあいだ」)というような不特定の期間を表す副詞句とも共起することができない。その一方で 2)が示すように、imperfecto は、その意味からすれば特定の期間と見做されうるが、数量名詞句から成る期間の副詞句と比べれば不特定と言わざるをえないような副詞句と共起することができる。

2) Durante esos años María vivía en Japón. その数年間マリアは日本に
の間 それらの 年 「住む」のimp. に 日本 住んでいた。

このように、従来の解釈における imperfecto と期間との関係は曖昧な点が多い[4]。

また、imperfectoが telicな事態を対象とする場合には上とは別種の問題が生じる。ここで、まず確認しておかなければならないのは、imperfectoで表出された telicな事態が期間の副詞句と何らかの関係を持つとき問題になるのは、当該事態の成立という意味での終結性の表示の有無ではなく、その事態の過去における「習慣性」の表示の有無だという点である。次の例文が示すように、telicな事態の imperfectoによる表出は、それが当該事態の主語の過去における習慣であることを示すことができる。

3) María se levantaba tarde todos los días. マリアは毎日遅く起きて
再帰動詞「起きる」のimp. 遅く すべての 定冠詞 日 いた。

この点に関して Butt & Benjamin は以下のように述べている。

“ In sentences involving phrases like *todos los días*(「毎日」 副詞句。), *todos los años*(「毎年」 副詞句。), the beginning and end of the period are not specified so the imperfect must be used.” (Butt & Benjamin 1994:213)

“ If the period is specified but the action consists of a series of repeated discontinuos events, either form is possible, the imperfect apparently being commoner: *Aquella semana se levantaba/levantó a las siete, y desayunaba/desayunó a las ocho* ‘That week he rose at seven, and breakfasted at eight, *El verano pasado salía/salió todos los días con él* ‘Last summer she went out with him every day’, *Aquel año trabajaba/trabajó mucho* ‘He worked hard that year’.” (Ibid.)

上の記述によれば、imperfectoによって表される事態が反復して行なわれるものならば、その期間は不特定でも特定でもよいということになる。これは先に見た“[The imperfect form is used] To indicate states or actions that continued in the past for an unspecified period.”という記述とは相容れないものである。しかも、上の引用文にもあるように、過去の反復された事態は imperfectoのみならず pretéritoによっても表すことができ、この点からすれば当該事態の反復性自体が imperfecto出現の決定的条件とも考えられない。このように、imperfecto と時間的限定性の関係には問題となる点が多いにも拘らず、従来のアスペクト説は imperfecto の時間的非限定性、すなわち、imperfectoの表す事態はその終結が明示されないということを自明のこととしてきたように思われる。そして、アスペクト説のこのような見方こそ「対照のimperfecto」を imperfectoの特殊な用法として扱うことの直接的原因になったと考えられるのである。

1.2. 対照の imperfecto とアスペクト説

それでは本稿が対象とする「対照の imperfecto」がどういうものなのかを見てみよう。Porto Dapena はこの imperfecto の用法について以下のように述べている。

“ 2.2.5.2. *El imperfecto de contradicción o contraste* Llamamos así al imperfecto cuando se usa para establecer una contradicción explícita o implícita —o un simple contraste—respecto al presente. Si queremos, efectivamente, subrayar que una acción o estado no posee continuidad en el presente, produciéndose incluso a veces en éste lo contrario, se usa normalmente el imperfecto, aun cuando, dado el carácter acabado del proceso verbal, lo esperable sería, lógicamente, el indefinido. Así, considérense los siguientes ejemplos: *No es lo que era./ No vive como vivía*, o estos otros, en que el interlocutor niega, por así decirlo, lo que otro da por supuesto en el presente: *Su familia tiene mucho dinero.—Lo tenía./Ese coche es de Juan.—Lo era. Se lo vendió a otro./Tú hablas muy bien el español.—Lo hablaba.* En cualquiera de estos contextos sería posible el uso del indefinido, pero la norma actual prefiere el imperfecto, cuya utilización, por cierto, se restringe a verbos durativos de carácter no perfectivo.” (Porto Dapena 1989:96-97)

(2.2.5.2.矛盾あるいは対照の imperfecto imperfecto が現在に関して明白な、あるいは、暗黙の矛盾—あるいは単なる対照—を設定するために使用される時、我々はその imperfecto を矛盾あるいは対照の imperfecto と呼ぶ。実際、ある行為や

状態が現在において継続性を有していないこと、そして時には現在においてそれとは逆の行為や状態が起こっていることを強調したい場合には、たとえ、その動詞プロセスの終結的特徴からすれば、論理的には indefinido(pretérito の別名。引用者)が期待されるであろう時にも、普通 imperfecto が使われるのである。以下の例を参照されたい：彼はかつての彼ではない。/ 彼は以前のようには暮らしていない。 あるいは次の例のように、聞き手が現在当然のことと思っていることを発話者がいわば否定する場合にも使用される：あなたの家族はたくさんお金を持っています。ー持っていました（が今は持っていません）。/その車はフアンのです。ーでした。彼はそれを他人に売ったのです。/君はスペイン語をとても上手く話す。ー話していました（が今は下手です）。これらの文脈のいずれにおいても indefinido を使用することは可能であろう。しかし、現在の規範では imperfecto の方が好まれる。そして、その使用は、確かに不完了的な継続動詞に限定される。）

上の説明によると、「対照の imperfecto」とは過去の事態と現在の事態を対照させるような場合に使用される imperfecto の用法ということが分かる。さて、この用法を先のアスペクト説の観点から見た場合の問題点は、当該事態の終結が明らかになっておりPorto Dapena の指摘にもあるとおり、アスペクト説の論理に従って考えるならば当然pretérito の使用が期待されるところで imperfecto が使用される点にあり、まさにこの点が「対照の imperfecto」を imperfectoの特殊用法としていると考えられる。では、この用法をアスペクト論者はどのように解釈しているのだろうか。

「対照の imperfecto」という用法を初めて明示的な形で指摘した Porto Dapena はpretérito と imperfecto の機能的差異に関してはアスペクト説と時間関係説の折衷説を取っている。しかし、自身が紹介した「対照のimperfecto」については専らアスペクト説の立場から解釈を加えており、その結果が‘norma actual(現在の規範)’という語の使用に繋がったと考えられる。つまり、アスペクト説の立場からすれば「対照の imperfecto」は明らかに imperfecto の本質的機能とは相容れないものであるため、その説明にはアスペクト説とは無関係の要因を持ち出すしかなく、それがこの「現在の規範」という語の使用に繋がったと思われるのである。これは Porto Dapenaが「対照のimperfecto」を imperfectoの慣習的用法と見做していることを示すものでもある。また、Porto Dapenaは「対照のimperfecto」がいずれの文脈でも pretéritoと置き換え可能であると述べているが、これも彼のアスペクト的立場を明らかにしたものと考えられる。上でも述べたように、「対照の imperfecto」が出現する文脈はアスペクト説からすれば当然pretérito が期待されるところであり、そこに実際 pretéritoが出現できるという指摘は、「対照の imperfecto」の存在がそのままアスペクト説を無効にするものではないこ

とを暗に示したものと考えられるからである。しかし、「対照のimperfecto」は本当にnorma actualに従っただけの imperfecto の単なる慣習用法にすぎないのであろうか。この問いに答えるためには、まず、「対照のimperfecto」という用法の実態を観察し、その結果、同用法がimperfectoの本質的機能とは別個に考察されるべき特殊なものか否かを判断すべきだと思われる。

2. 対照の imperfecto の実態

この章では前章で紹介した「対照のimperfecto」という用法の実態を観察し、それがPorto Dapena の主張するように norma actualに基づく慣習用法なのかどうかを検討する。実態調査に当たっては、スペインで発行されている週刊誌 Cambio16を主たる資料体とし、そこに出現する当該用法の振舞いを観察することにした。

2.1. 対照の imperfecto の出現環境

まず、「対照の imperfecto」がどのような環境で出現するか、言い換えるならば、どのような環境に出現する imperfecto が「対照のimperfecto」と解釈されるかを見てみよう。

Porto Dapena の挙げた「対照の imperfecto」では、以下の例文が示すように、当該imperfectoによって表される内容とそれに対応する presente の文が単に併置されることによって両文の対照性が表されていたが、本稿が対象とした資料体の中にこれと同じタイプの「対照のimperfecto」を見つけることはできなかった。

4) No es lo que era　　彼は以前の彼ではなかった。
否定 「である」のpres. 定冠詞 関係代名詞 「である」のimp.

5) Tú hablas muy bien el español.　　君はスペイン語をとてもうまく話す。
君は 「話す」のpres. とても うまく 定冠詞 スペイン語
Lo hablaba.　　話していました(が今は下手です)。
それを 「話す」のimp.

本稿の資料体の中で実際「対照のimperfecto」と判断された文の環境は以下に記すとおりである。

まず、antes(「かつて」) という副詞句と共起した imperfecto と ahora (「今、現在」)という副詞句を伴った presenteの文が併置されたもの。ただし、この時、imperfecto によって表された文と presente によって表された文とは単に時制が異なるのみ

ならず、その表す事態そのものも異なっていた。従って、これら二文の対照性は時制形式の違いのみならず、当該二文の事態内容上の対照性によっても示されていると考えられる。

6) *Antes* me acosaban con preguntas sobre mi intimidad, decían que era de su propiedad. *Ahora* me respetan. (No.1966:98)
(かつて彼らは私の私生活について質問して私を困らせていた、私の私生活は彼らの物だと言っていた。彼らは今は私を尊敬している。)

7) Gente que *antes* era simpática conmigo *ahora* es antipática. (No.1270:71)
(かつて私に対して感じのよかった人たちが今は感じが悪い。)

上記のように対照性を示す二文の事態が全く異なっている時には、antes, ahora といった相反する時の副詞句が一組になって付加されることが多いが、それは必ずしも義務的ではなく、以下のようにその一方が省略されることもある。

8) Nuestros diplomáticos van con la cabeza alta por todo el mundo y *antes* tenían que ir mendigando. (No.1267:30)
(私たちの外交官は頭を高く掲げて世界中に出かけていますが、かつては物乞いしながら出かけていかなければならなかった。)

9) *Antes* dudaba sobre mi capacidad para dirigir, *pero* después de haber hecho el documental Cacoa y tantas películas como actor, me siento bastante seguro. (No.1264:80)
(かつて私は自分の監督力を疑っていたのですが、ドキュメンタリー作品の Cacoa や俳優として多くの映画をやった後、十分の自信を感じています。)

また、imperfectoによって表される事態と対照をなすべき現在の事態が直接 presente によって表されず、逆接を示す接続詞 pero や文脈から暗黙に理解されるような場合もある。

10) Hablando del circo: *antes* los directores apenas tenían protagonismo, *pero ahora*... (No.1271:103)
([映画祭の]そのサーカス一座について話すならば、かつては監督が主人公になる

ことはほとんどありませんでしたが、今は[主人公になっています]...)

10) の pero ahora 以下を補うならば、" pero ahora los directores tienen mucho protagonismo " となるだろう。このように、imperfecto の事態と対照をなすべき現在の事態が省略されている場合は、imperfecto によって表された事態をそのまま presente に書き替え、同時にその真偽価値を逆転させることによってその復元が可能になる。

以上、「対照の imperfecto」が出現する環境を見てきた。上でも述べたように、本稿が収集したデータの中に現れた「対照の imperfecto」は Porto Dapena が挙げた例とは対照される二文の事態命題そのものが異なっている点、ahora や antes といった対照的な時の副詞句と共起している点、さらに、対照されるべき事態が省略されることがある点において違いを見せている。これは「対照の imperfecto」という用法の出現環境の多様性を示すものであろう。しかし、その多様性にも拘らず、今回の調査で「対照の imperfecto」と判断されたものと Porto Dapena の例の中には重要な共通点がある。それは、「対照の imperfecto」が出現する時には、顕在的にせよ潜在的にせよ、常にそれと対照的な事態を表す presente の文が併置されるということである。これは、「対照の imperfecto」の持つ特性からすれば当然のことに思える。しかし、この用法が常時それと対照的な意味を持つ presente 文の存在を含意するという事実は、後述する pretérito との置換性の問題において特に重要な意味を持ってくる。

2.2. 対照の imperfecto が出現する事態の種類

先の Porto Dapena の指摘によれば、「対照の imperfecto」の生起は不完了的な継続動詞(verbos durativos de carácter no perfectivo)に限定されるということであったが、これは当該用法の実態を反映したものとは言えない。以下の例文にも見られるように、「対照の imperfecto」という用法は不完了的な継続動詞とは判断されない動詞、あるいは事態にも散見されるからである。

11) Antes, por estar casada una mujer no podía abrir una cuenta corriente sin la firma del marido o no podía solicitar el pasaporte para sus propios hijos. Por fortuna hemos logrado transformar las leyes. (No.1265:51)
(かつて、結婚していると女性は夫の署名なしには銀行の口座を開設すること、あるいは、自分の子供のためのパスポートを申請することができませんでした。幸い、私たちはその法律を変えることを達成しました。)

12) Antes se hacía balance a los cien días. Ahora el Gobierno se ha adelanta-

do y lo ha hecho al mes afirmando que su valoración es positiva.
(No.1281:11)
(かつて決算は100日ごとに行われていました。現在政府はその査定が好ましいからと言って繰り上げて1ヵ月ごとの決算をしています。)

11)の imperfecto で表された部分、no podía abrir una cuenta corriente, no podía solicitar el pasaporte には否定の no, また、poder という助動詞があるので、これを典型的な telic 事態と見做すことには問題があるかもしれないが、だからと言って、この事態を不完了的で継続的なものと見做すことはさらに難しいと思われる。一方、12)の hacía balance は「決算を行う」という典型的に完了的な事態の imperfectoであり Porto Dapena の主張のよい反例と言える。このように「対照のimperfecto」が不完了的でない事態にも適用されるということは、次に挙げる文がインフォーマントによって文法的と判断されたことによっても示される。

13) José se levanta temprano, ¿ no ? --- Se levantaba temprano, pero ahora...
「起きる」現在形 早く 否定辞 「起きる」のimp. 早く しかし 今
ホセは早く起きるよね。 早く起きていた、でも今は(そうではない)...

14) Tú vas al cine mucho, ¿ no ? --- Iba mucho, pero ahora...
君 「行く」現在形 映画へ よく 否定辞 「行く」のimp. よく しかし 今
君は映画によく行くよね。 よく行っていた、でも今は(そうではない)...

13)で「対照の imperfecto」を示しているのは levantarse temprano(「早く起きる」)という事態であるが、これは Vendler の分類に従えば achievement に属するものであり Porto Dapena の不完了的な継続動詞という指摘には全く当てはまらないものである。また、14)のir al cine (「映画に行く」)という事態も Vendler の分類によれば、accomplishment となる事態であり、13)と同様に Porto Dapena の指摘には合わないものである。

本稿が週刊誌 Cambio16を対象に行った調査の結果によれば、確かに「対照の imperfecto」という用法は不完了的な継続動詞と共に起こっていることが多い[5]。しかし、そのことを以て、この用法が専ら不完了的な継続動詞、言い換えるならば、state や activityと言った atelic な事態に限定されると断言することはできないだろう。上の例

文にも明らかなように、「対照の imperfecto」という用法は atelic な事態のみならず telic な事態にも問題なく適用できるからである。 この観察結果は、Porto Dapena の指摘の不十分さだけではなく、彼が「対照のimperefecto」の適用される事態の頻度の問題とその適用性自体の問題を混同していることをも示唆するものと言えよう。

2.3. 対照の imperfecto と pretérito の置換可能性

次に「対照のimperfecto」と pretérito との置換性について調べてみよう。 Porto Dapena の説明によると、「対照の imperfecto」の出現する文脈ではいずれにおいても pretéritoの使用が可能となっている。そこで、本稿はその実態を観察するために以下のような質問項目を４人のインフォーマント[6]に提示しその回答を分析することにした。

A a. Usted tiene un coche maravilloso, ¿no？
あなたは素晴らしい車を持っていますよね。

---Lo tenía/tuve, pero se lo vendí a un amigo.
「持つ」のimp./pret.
持っていましたが、それは友達に売りました。

a'. Tu marido se levanta muy temprano, ¿no？
君のご主人はとても早く起きるね。

---Se levantaba/levantó temprano, pero ahora...
「起きる」のimp./pret.
早く起きていましたが、今は...

B b. Ahora vivo en Madrid, pero antes vivía/viví en Barcelona.
「住む」のimp./pret.
今は私はマドリードに住んでいますが、以前はバルセローナに住んでいました。

b'. Ahora José llega puntual, pero antes llegaba/llegó muy tarde.
「到着する」のimp./pret.
今はホセは時間どおりにやって来ますが、以前はとても遅刻していました。

上の質問項目のうち、Aのタイプは Porto Dapena の出した例文に倣い、初めにpresenteで表された現在の事態を提示し、その後に続くそれと対照をなすべき過去の事態が imperfecto と pretérito のどちらの形式によってより適切に表されるかをインフォーマントに判定してもらうことを意図したものである。インフォーマントには予め、提示された二形式の中からより適切だと思うものには○、より適切ではないと思うものには△さらに、その形式が当該環境において受け入れられない(no-aceptable)と判断される

場合には×の印をつけるよう指示された。この質問形式そのものは「対照のimperfecto」と pretéritoの置換性を直接問うものではないが、「対照のimperfecto」の出現が予想される環境において imperfecto と pretéritoのどちらが選択されるかを問うことは当該環境に出現する形式の確定のみならず、間接的にその形式と他の形式との置換の可能性を知ることにもつながると思われる。Aタイプの質問は全部で7問出題されたが、質問対象となる事態には前節で得られた観察結果を踏まえて、a.のような atelic なものと a'.のようなtelic なものの両方を用意し、事態の時間構造上の違いが当該二形式の選択の違いに反映されるか否かも合わせて検証した[7]。一方、Bの質問項目は問題文に ahora と antesという副詞句が付加され現在の事態と過去の事態の対照性が際立たされたものである。このタイプの質問に対するインフォーマントの回答方法、また、質問対象となった事態の種類はどちらも先のAタイプと同じ要領にした[8]。以上のような手続きを経て作成された質問に対するインフォーマントの回答結果は次のようにまとめられる[9]。

(1) Aタイプ、Bタイプどちらの質問においても imperfecto の方が pretérito よりも、より適切な形式として選択されることが多かった。

(2) Aタイプ、Bタイプどちらの質問においても、当該事態が telic な場合には、imperfecto が選択される可能性が極めて高かった。逆に、pretérito はほとんどの場合、受け入れられない(no-aceptable)と判定された。

(3) Aタイプ、Bタイプどちらの質問においても、当該事態が atelic な場合には、imperfecto と pretérito の選択に揺れが見られた。

(1)は、すべての質問項目においてより適切な形式として選択された頻度の高いのがimperfectoであったことを示す。確かに質問によっては、回答の中の imperfecto の方を×とし、対応する pretéritoを○とするものもないわけではなかったが、そのような回答者は1名だけであり、しかもその同じ回答者が質問タイプは違うが同じような事態の別の問題に対しては imperfecto を○としている点を考慮するならば、この回答だけを取り立てて relevant と見做す理由はないと思われる[10]。

次の(2)は Porto Dapena の記述との関係において特に重要な結果と考えられる。それは、これが先に述べた「対照のimperfecto」は atelicな事態だけではなく telicな事態にも適用されるということを実証しているのみならず、telic な事態における同用法がpretéritoに置き換えることが極めて難しいこと、つまり、telicな事態における「対照のimperfecto」が表そうとするのが、まさにこの imperfectoという形式に特有のものであることを明確に示しているからである。中でも、後者の点は、山村(1996a:123-124)が指摘した「telicな事態の pretéritoは当該事態の終結を示す」という点と併せて考えるととりわけ意味深いものとなってこよう[11]。telic事態に見られる「対照のimperfecto」

が pretéritoと置換され難いのは、その imperfectoの表出するものが当該事態の終結ではないということを明示していると解されるからである。

(3)の結果は Porto Dapena の記述に即したもののように見えるが、ここでもより適切な形式として選択されたのが専ら imperfectoであった点は確認しておくべきであろう。ただ atelic な事態に特徴的なのは、pretéritoが△や○と判定されることが多く telic事態の時のように no-aceptable と判定されることが少なかったという点である。このように対象とする事態の違いに応じて imperfecto と pretéritoの置換の可能性に違いが見られるという事実は、「対照のimperfecto」の pretérito による置換性がいわば局部的な現象であることを示唆するものと思われる。

2.4. まとめ

ここで本章で得られた「対照のimperfecto」の実態をまとめておこう。

まず、「対照のimperfecto」の出現環境については、本章第1節で見たように様々な場合があったが、そのいずれにおいても常に問題の imperfectoと対照的な事態を表すpresenteの文が併置されうるという点が特徴であった。

次に「対照のimperfecto」が出現する事態の種類を見た。Porto Dapena の説明によると「対照のimperfecto」の出現は不完了的な継続動詞に限定されるということであったが、この指摘は当該用法の実態を反映したものとは言えない。「対照のimperfecto」は telic, atelic両方の事態を対象とすることが確認されたからである。このことは、当該用法が特定の意味的特徴を有した事態のみに適用される特殊なものではなく、imperfectoによって表されるすべての事態を対象とする一般的な用法であること、従って、その説明は imperfecto という形式の持つ本質的機能との関連において行われるべきであるということを示していると思われる。

最後の「対照のimperfecto」と pretéritoの置換性については、対象となる事態が telic か atelicかによって異なる結果を得た。すなわち、telic な事態が対象の場合、「対照のimperfecto」が予想される環境ではほとんどの場合 imperfectoが選択され、pretérito は no-aceptable と判定されたのに対し、atelic な事態が対象の場合には同じ環境でも imperfecto と pretéritoとの選択の間に揺れが見られたのである。この結果からすれば、一応「対照の imperfecto」は容易に pretéritoに置換されない imperfecto 特有の用法と考えることができそうである。しかし、そう考えたとしても、atelicな事態を対象とした場合の判定の揺れの問題はそれとして残るであろう。

以上、「対照の imperfecto」の実態の観察結果をまとめた。その中でも特に重要と思われるのは、この用法がすべての事態を対象に起こるという点と pretéritoとは簡単に置換されないという点の二点である。なぜなら、この二点はどちらも「対照のimperfec-

to」が単に norma actualという語で処理されるような慣用的な用法などではなく、imperfecto の持つ一般的機能、すなわち、この形式の動詞体系における機能に即したものであることを示唆すると考えられるからである。このことを踏まえた上で、再びこの用法をアスペクト説という観点から眺めてみると、説明の困難な点が目立つ。中でも「対照のimperfecto」が容易に pretéritoとは置き換えられないという点は、同用法がアスペクト説的論理に従うならば当然 pretéritoの出現の予想されるところで起こるものであるが故に、同説にとってはとりわけ説明の難しいものとなろう。このように「対照のimperfecto」という用法はアスペクト説の有効性を危うくする可能性を十分持ったものと言える。

3. 対照の imperfecto に対する新しい解釈

前章では「対照のimperfecto」を従来のアスペクト説の枠組みで説明するのは難しいことが指摘された。そこで本章では、 pretérito とimperfecto の機能的差異をアスペクト説とは異なる観点から説明する時間関係説を用いながらこの用法に新たな解釈を加えることにする。そして結果的には、「対照のimperfecto」という用法を imperfecto の体系的機能及び前章で得られた結果を忠実に反映する形で説明するためには Rojo(1974)、山村(1994,1996a)で提案された時間関係説の枠組みが有効であること、そして、その枠組みに従って解釈するならば「対照のimperfecto」は何ら特殊なものではなく imperfectoという形式の持つ基本的機能に即した一用法と分析されることを示していく。

3.1. 時間関係説の概要

3.1.1. Rojo(1974)の時間関係説

本稿が時間関係説と呼ぶ枠組みそのものは決して目新しいものではない。特に、pretérito と imperfectoを問題とした場合、これら二形式の機能的差異をアスペクトという概念を用いて説明するようになったのは今世紀になってからであり、それ以前は時間関係という語は用いないのものの、実質的には今日の時間関係説と同様の枠組みでこの二形式を分析することが多かったと思われる[12]。しかし、本稿が扱う時間関係説はこのような伝統的なものではなく主にRojo(1974)に基づくものであることを予め断っておきたい。

Rojo(1974)は数あるスペイン語時制論の中でも特に異彩を放つものである。それは、この論文の中では従来の時制論が自明のこととしてきた過去・現在・未来という時間の三分割が放棄されているからである。Rojo は言語の表す時性、つまり言語的時性 (temporalidad ligüística)は物理的時性(temporalidad física)とは異なるもので、その基本はある出来事の他の出来事に対する、「前」、「同時」、「後」といった方向(orientación)、

換言するならば、ある基準時とそれに対する「前」、「同時」、「後」といった時間関係にあると述べている[13]。このような見方をするならば、例えば同じ過去という時間領域にある事態もその基準時の設定の仕方によっては異なる言語的時性を付与される可能性が出てくるが、これこそまさに Rojo が pretérito と imperfectoの違いを分析する際に取った立場であった。

Rojo(1974)の pretérito と imperfecto に対する分析はそれぞれ 0-V, (0-V)oVという公式で表されている。0 は origen(「起点」) と呼ばれる基準時を示すもので多くの場合発話時と一致する。一方、-V, oVは設定された基準時に対する方向を示す記号で、前者は「前時性」、後者は「同時性」を示す。方向を示す記号にはこの他にも「後時性」を示す +V があるが、本稿の議論とは直接の関係を持たないのでここでは扱わない。以上のことを踏まえてRojo の pretérito と imperfecto の分析を解釈するならば、pretérito は発話時より前にある事態を、imperfecto は発話時より前にある基準時に対して同時的な事態を示す形式ということになる。この分析でとりわけ重要なのは、当該二形式がアスペクト説の場合のように最小対を形成していない点である。つまり、Rojoの分析によれば pretérito と imperfectoは基準時もそれに対する方向も異なっているため、これら二形式が何らかの素性を共有した最小対になることはないのである。

さて、Rojo の分析でもう一つ特徴的なのは、imperfecto と presente が同じ方向、「同時性」を共有するものと分析されている点である。Rojo の presenteに対する分析は 0oVという公式によって示されるが、これは presente が発話時と同時関係にある事態を表すことを示すものである。一方、imperfectoは先に見たように発話時より前にある基準時に対して同時関係にある事態を表すと分析される。従って、presenteとimperfectoを比較してみると、その違いは各々の「同時性」が設定される基準時にあるのみということになる。このような分析をアスペクト説の中で行うことは難しいだろう。アスペクト説における presente は図1でも見たように imperfecto と pretéritoの両方と対立するものであり、それが imperfecto と何らかの類似性を持つことは体系的に不可能だからである。しかし、presente と imperfectoの実態を調べてみると、この二形式の間には Rojo の分析が示唆するような機能上の類似性が存在することが分かる。この点については 3.2. で詳述したい。

3.1.2. 山村(1994,1996a)による Rojo(1974)の修正

Rojo(1974)で提示された pretérito と imperfectoの分析は従来のアスペクト説に対して一石を投じることになったが問題がないわけではなかった。その中でも、解釈上特に問題となったのは、pretérito の 0-V という公式と imperfecto の (0-V)oV という公式の一部にある(0-V)の関係である。これらの公式をそのまま解釈するならば、imper-

fectoの(0-V)は pretérito の0-V と同じ価値を持つものと理解されるだろう。しかし、実際には、imperfecto の(0-V)の表すものと pretérito の 0-V の表すものの間には以下に述べるような違いがある。

imperfecto の(0-V)の表すものは発話時以前に定位された時点（時間領域）であれば何でもよく、実際それは動詞の時制(15)、時の副詞句(16)等様々な形で示される。

15) Cándido Méndez dijo que usted no le provocaba ansiedad. (No.1217:9)
「言う」のpret. 接続詞 あなた 否定 彼に 「引き起こす」のimp. 焦燥感
カンディド・メンディスはあなたは彼に焦燥感を起こさせないと言いました。

16) De crío escuchaba Ondas Infantiles, un espacio al que las madres
子供の頃 「聴く」のimp. 波 子供の 一つの 番組 に 関係代名詞 定冠詞 母親
llevaban a sus hijos. (No.1271:107)
「連れていく」のimp. を 彼女たち 子供
子供の頃私は母親たちが子供を連れていく番組「子供の波」を聴いていました。

これに対して pretérito の 0-V は時間軸上の定まった時点（時間領域）とは異なるものを表すと考えられる。もし pretérito の 0-V が imperfecto と同様に発話時以前に定位された時点を表しているのであれば、pretérito の出現は imperfecto と同程度に随意的であるはずだが、実際のこの形式の出現は imperfecto と比べて制約を受けることが多いからである[14]。これは imperfecto と pretérito の非対称性を示すものと言えるが、山村(1996a)は、このことを基にしながら、さらに、pretérito による表出が不可能な諸事態の意味的特徴を調べ、pretéritoの 0-V は当該事態の時間軸上の定位化ではなく、当該事態の不成立から成立への変化の実現を表すという 0-Vに対する新たな解釈を提示した[15]。

以上、Rojo(1974)に現れる pretéritoの 0-Vと imperfectoの公式の一部である(0-V)の意味するところには違いがあることを見た。以下、本稿ではこの違いを明示化するために、imperfecto の (0-V)が表す既定の過去時は 山村(1994)に倣って Pという記号で表すことにする。従って、これまで (0-V)oVと記述された imperfecto の機能は新たにPoVと書き表わされることになる。また、pretérito の 0-V については上で述べた山村(1996a)の解釈に従い、当該事態の不成立から成立への変化の実現を表すものと考えることにする。

3.2. presente と imperfecto の機能的類似性

Rojo(1974)、山村(1994)の分析によれば presente と imperfectoはそれぞれ OoV,PoV と公式化される。これらの公式に従うならば、当該二形式は oV によって示される各基準時に対する「同時性」を共有し、違いはその同時性が設定される基準時にあるということになる。つまり、Rojo(1974)や山村(1994)の提唱する時間関係説によればimperfecto は presenteの基準時が発話時より前のいずれかの時点（時間領域）にシフトしたものと解釈されるのである。本節ではこの見解の論拠となる諸現象を列挙していく。

まず、imperfecto が presenteの基準時を既定の過去時にシフトしたものであることを最も明瞭に示すのは、いわゆる時制の一致という現象に見られるこれら二形式の対応関係である。

17) María dijo:— Mi padre canta muy bien.
「言う」のpret. 私の 父 「歌う」のpres. とても うまく
マリアは言った。「私の父はとてもうまく歌う」

17)' María dijo que su padre cantaba muy bien.
接続詞 彼女の 「歌う」のimp.

17)は主動詞が pretéritoの直接話法の文であり、17)'はそれを間接話法に転換したものである。この二文から明らかなように主動詞が過去の時制形式の時、直接話法で presenteで表された従文事態は間接話法で imperfectoで表される。この時制形式の転換は体系的なものであり、特別な条件がない限りほぼ自動的に行われる。

同様の体系的類似性は以下のような imperfecto と presente の平行的現象にも観察される。

18) Son las ocho y media. 8時半だ。
「である」のpres. 定冠詞 8 と 半

18)' Eran las ocho y media. 8時半だった。
「である」のimp. 定冠詞 8 と 半

18)" *Fueron las ocho y media. 8時半だった。
「である」のpret. 定冠詞 8 と 半

スペイン語では、18)に対応する過去の時間表現は18)'のように必ず imperfecto で表出され pretérito によって表されることはない。このようにスペイン語には presente と imperfecto による表出は可能であるが、対応する pretéritoによる表出は不可能という事態が少なからず存在する。また、これとは逆に pretéritoによる表出は可能でも対応する presente, imperfecto による表出が困難なものも存在する。

19) *María vive 4 años en Madrid. マリアは４年マドリードに住んでいる。
「住む」のpres. 4 年 に

19)' *María vivía 4 años en Madrid. マリアは４年マドリードに住んでいた。
「住む」のimp. 4 年 に

19)" María vivió 4 años en Madrid. マリアは４年マドリードに住んでいた。
「住む」のpret. 4 年 に

以上の presente と imperfecto の平行的現象、及び、pretérito による表出の不可能な事態の存在は presente と imperfecto が同じ機能を有していることのみならず、pretérito の機能がこれら二形式とは全く異なっていることを示唆すると思われる。

次に imperfecto と presente の間にある解釈上の類似性について見ておこう。
ここで重要なのは、各形式の意味するところはそれによって表出される事態の時間構造の違いによって異なってくるという点である。まず、対象となる事態が stateの場合を見てみると、その presente, imperfecto による表出は当該事態が発話時あるいは既定の過去時において真である状態を示すことが分かる。

20) María está/estaba en Madrid. マリアはマドリードにいる/いた。
「いる」のpres./imp. に

21) María sabe/sabía la noticia. マリアはそのニュースを知っている/知っていた。
「知る」のpres./imp. 定冠詞 ニュース

一方、対象となる事態が activityの場合には複数の解釈の可能性がある。

22) María estudia/estudiaba inglés. マリアは英語を勉強している/勉強していた。
「勉強する」のpres./imp. 英語

22)の presente による表出は、[María estudiar inglés]という事態がまさに話者の眼前で展開していること[16]と同時に、当該事態が María によって示される人物の属性[17]であることを示すことも可能で、後者の場合、当該事態は話者の眼前で展開している必要はない。同様のことは 22)の imperfecto による表出にも当てはまるが、この形式の基準時は既定の過去時であり発話時ではない。また、22)の例文には発話時以後を示す副詞句を付加することも可能で、その場合には以下の例文が示すように当該事態の主語たる人物の予定を示すことになる。

23) Mañana María estudia/estudiaba inglés. 明日マリアは英語を勉強する/勉強することになっていた。
明日 「勉強する」のpres./imp. 英語

次に presente, imperfecto によって表される事態が telicな場合を見てみよう。まず、対象となる事態が accomplishmentの場合は以下のようになる。

24) María escribe/escribía una carta. マリアは一通の手紙を書いている/書いていた。
「書く」のpres./imp. 一つの 手紙

当該事態が accomplishment の場合にも複数の解釈が可能である。activityの時と同様に、その presente, imperfecto による表出は当該事態が基準時において展開中であることを示すだけでなく、当該事態がその主語である人物・事物の属性であることを示すこともあるし、23)のように発話時以後あるいは既定の過去時以後を示す副詞句が付加されると、その主語の予定を表すこともできる。

他方、対象となる事態が achievementの場合には、定義上、当該事態が基準時において展開中であることを示すことは難しく、その presente, imperfecto が表すのは当該事態が開始する前の前段階(preliminary phase)と考えられる。しかし、この achievementも主語の属性や予定といった複数の解釈が可能な点は accomplishment と同じである。

25) María llega/llegaba temprano a la oficina. マリアは早くオフィスに到着する/到着していた。
「到着する」のpres./imp. 早く に 定冠詞 オフィス

以上、presente と imperfecto によって表出された事態の解釈上の類似性を見た。その中で特徴的なのは、当該事態が state以外の場合には複数の解釈が可能という点で、

それは大きく、当該事態がその基準時においてまさに展開中であることを示すという解釈と当該事態はその基準時においては展開しておらず当該形式が示すのは当該事態の主語たる人物・事物の基準時における属性と解釈される場合の二種類に分けられた。これはRojo(1974), 山村(1994,1996a)が主張する presente, imperfectoの「同時性」が当該事態と基準時の時間的一致を必ずしも要求するものではないことを示したものである。本稿で扱う「同時性」はこの presente, imperfectoに見られた二つの解釈を包含するものとする。

3.3. 時間関係説から見た対照の imperfecto

この節では時間関係説から見ると「対照のimperfecto」がどのように分析されるかを見ていく。まず、Porto Dapena が挙げた例文に即したものを取り上げてみよう。

26) Tu marido se levanta muy temprano, ¿ no ? --- Se levantaba temprano, pero
君の 夫 「起きる」のpres.とても 早く 否定辭 「起きる」のimp. 早く しかし
ahora...
今

君のご主人は早く起きるね。早く起きていましたが、今は...

26)は telicな事態を対象としたものである。2.3.でも述べたように telic な事態を対象とした「対照のimperfecto」は pretéritoとは置換し難く、それは telicな事態の同用法が imperfecto に特有の機能に基づくものであることを示している。このことを踏まえた上で再度上記の例文を観察すると次のようなことが分かる。

2.1.でも述べたように、「対照のimperfecto」にはそれと対照的な事態を表す presenteの文が併置されるのが一般的であるが、26)では前半の presenteの文がそれに当たっている。この presenteの文は当該事態の主語の属性、つまり「君のご主人は早起きだ」ということを表したものであり、発話時においてその事態が展開中であることを表したものではない。一方、それに対する imperfectoによって表された事態を見ると、これも既定の過去時における当該事態の主語の属性を表すものである。つまり、26)では tu maridoで言及される人物の発話時における属性と既定の過去時におけるそれが対照されているわけであるが、この対照された属性そのものは同じ内容(tu maridoで言及される人物が早起きだということ) である。従って、26)で実際に relevantな情報となるのはその属性が有効と判断された基準時のギャップであり、それが結果的に、当該属性の発話時における無効性という解釈を導き出すと考えられる[18]。この見方に従うならば presenteによって表出された当該事態の発話時における無効性は imperfectoという動詞形

式によって直接示されたものではなく、同じ事態内容を presenteと imperfectoで表出し、それを併置させたことによって間接的に理解されたものということになる。同様のことは 27)が示すように atelicな事態を対象とした「対照のimperfecto」についても観察されるが、2.3.で述べたように、atelicな事態の imperfectoは pretéritoと置換されやすい。この点については次節で詳述したい。

27) Usted habla muy bien el japonés, ¿ no ? --- Lo hablaba bien, pero...
あなた 「話す」のpres. とても うまく 定冠詞 日本語 否定辞 それを 「話す」imp. うまく しかし
あなたは日本語をとてもうまくお話しになりますね。うまく話していましたが...

他方、ahora や antes, また peroという逆接の接続詞と共起した「対照のimperfecto」では対照される二文の事態内容が異なっていることが多い。しかし、その presenteの表すものが ahoraの示す発話時における主語の属性であり、imperfectoの表すものが antes の示す過去時における主語の属性であるという点は上で見たものと共通であることから、その解釈のメカニズムは先に扱ったものと基本的には同じであると考えられる。

さて、上で観察されたことを時間関係説の観点から考察してみよう。まず、確認しておかなければならないのは、「対照のimperfecto」の示す当該事態の発話時における無効性は、当該事態の主語の発話時における属性と既定の過去時におけるそれとを併置させた結果、語用論的に理解されるものという点である。これは「対照のimperfecto」という用法が、主語の発話時における属性と既定の過去時におけるそれとを比較対照させることによって初めて成り立つものであることを示すものであるが、この点を基に時間関係説の観点から「対照のimperfecto」における imperfectoの出現を解釈するならば、それはまさに必然的なものと判断される。当該事態の主語の発話時における属性を示すのが presenteだとするならば、その過去時における属性を示すのは当然この presenteと体系的に平行関係にある imperfectoになるはずだからである。このように、時間関係説では presenteと imperfectoが同一の機能を有するものとして分析されているため、「対照のimperfecto」のようにこれら二形式の類似性に基づく用法が簡単に説明される。一方、図１で示したようなアスペクト説は presenteと imperfectoの間に何の相関性も認めないために、この二形式の共有する機能に基づく用法の説明は大変困難で、「対照のimperfecto」のような用法は、結局、その対立項である pretéritoとの関係によって分析せざるをえなくなるのである。

3.4. 時間関係説から見た対照の imperfecto と pretérito

前節では「対照のimperfecto」という用法におけるimperfectoの出現は、対照されるべ

き事態がpresenteによって表出される点からすれば必然的なものであると結論づけられた。しかし、この必然的とされる imperfectoの出現が pretéritoに取って代られることがある。「対照のimperfecto」の対象となる事態が atelicな場合がそれである。そこでこの節では、なぜ atelicな事態では imperfectoと pretéritoの置換が起こりやすいのか、また、telicな事態ではなぜその置換が起こりにくいのかを考えてみたい。

まず、atelic事態の imperfecto と pretérito の関係を山村(1996b)の図を基に以下に示してみよう。I は当該事態の開始点、F はその終結点、また、～P は当該事態の不成立、Pはその成立を示す。さらに、当該事態の pretérito による表出が示すものは▒で、また、その imperfectoによる表出が示すものは－－→で表す。

(a) María supo(pret.)/sabía(imp.)la noticia. ～P I (=P) －－→ (F) ～P
マリアはそのニュースを知った/知っていた。 P

(b) María paseó/paseaba por el parque. ～P I (=P) ▒▒→ Farb. ～P
マリアはその公園を散歩した/していた。 P

図3

(a)は state, (b)は activity事態である。3.1.2.で指摘したように、pretéritoは当該事態の不成立から成立への変化の実現を表すが、この形式が(a)(b)のような atelic な事態に適用されると上の図に見られるように、その事態の開始点が示されることになる。一方、これら atelicな事態の imperfectoによる表出が意味するところは当該事態の種類によって異なり、それが stateの場合には当該事態成立後の状態が、また、activityの場合には当該事態の成立の集積である状態が示されることになる。しかしながら、このいずれの場合においても、その imperfecto が当該事態の不成立を示すことはないという点は共通で、そのことからすれば atelic事態の imperfectoはその pretéritoによる表出を前提としたものと言うことができる。さて、このような観察結果からするならば、「対照のimperfecto」の対象となる事態が atelicな場合において特に pretéritoとの置換が起こりやすいという事実は必ずしも理解のできない現象ではなくなる。なぜならば atelicな事態の imperfectoが pretéritoによる表出を前提とするものならば、当該事態の pretéritoによる表出は逆にそのimperfectoの意味するところを含意することができると考えられるからである[19]。

これに対して telic事態が対象の場合の置換の難しさは次のように考えることができる。

(a) María escribió/escribía una carta. ～P I ———→ Fnat.(=P) ～P
マリアは一通の手紙を書いた/書いていた。 ～P

(b) María llegó/llegaba a la cumbre. ———→ I, Fnat.(=P) ～P
マリアはその頂上に到着した/到着しつつあった。 ～P

図4

上図の(a)は accomplishment,(b)は achievement事態を示したものである。この図によると、telic事態の pretéritoの表す当該事態の成立は imperfectoの表す事態を含意することはない。telicな事態の imperfectoは pretéritoの表す当該事態成立以前の不成立な状態を示すだけであり、atelicな事態のそれのように pretéritoの表出がその前提となることはないからである[20]。この結果、telicな事態を対象とした「対照のimperfecto」が pretéritoに置換されると、それは単に当該事態が成立したという事実を示すだけとなるが、これは併置された presenteの表す当該人物・事物の属性の表現とは性質を異にするものである。つまり、telicな事態において pretérito との置換が困難なのは、そうすると併置される二文のうちの一方(presenteの文)が当該人物・事物の属性を示すのに対し、もう一方(pretéritoの文)は当該人物・事物が関与した出来事を示すといった具合に、対照されるべき二文の表出内容にズレが生じ、対照関係そのものが成立しなくなるためだと考えられる[21]。

4. 結論に代えて

本稿で考察された内容を順を追ってまとめると次のようになる。

(1) Porto Dapenaが「対照のimperfecto」と呼ぶ imperfectoの用法は、pretéritoと imperfectoの機能的差異を「完了性」の有無という観点から説明しようとするアスペクト説の立場からすると、単に「現在の規範(norma actual)」に従ったものというように imperfectoの本質的機能とは関連を持たない形で解釈されることになる。

(2) しかし、「対照の imperfecto」の実態を観察してみると、この用法は常に対応する presente 事態と併置されながらすべての事態に適用されるものであり、容易に pretéritoとは置換されないものであることが分かる。これは「対照のimperfecto」がimperfectoの持つ体系的機能に即した用法であることを示唆するものと考えられるが、従来のアスペクト説ではそれをうまく説明することができない。

(3) そこで、アスペクト説に代るものとして新たに Rojo(1974), 山村(1994,1996a)の提唱する時間関係説によってこの用法の説明を試みることにした。この時間関係説に従うならば、imperfectoは既定の過去時における同時性を示すもの(PoV)、また、pretérito は発話時から見た当該事態の不成立から成立への変化の実現を示すもの(0-V)と

分析されるため、これら二形式がある素性をめぐる最小対となることはない。また、imperfectoは presenteと「同時性」という機能を共有するものと分析され、これら二形式の違いはこの同時性が設定される基準時の違いにあるとされる。

(4) 時間関係説という立場から「対照のimperfecto」を解釈するならば、この用法が出現する環境における imperfectoの使用は必然的なものと判断される。それは、「対照のimperfecto」の出現環境において対照項となる presenteの表出するのが当該人物・事物の発話時における属性であり、これと対照をなすべき既定の過去時における属性を示すことができるのはこの presente と体系的に平行関係にある imperfecto しかないからである。このように、時間関係説では presenteと imperfectoが「同時性」という機能を共有するものと分析されるため、「対照のimperfecto」のようにこれら二形式の類似性に基づく諸用法が簡単に説明されることになり、それがこの説の利点となっている。

(5) しかしながら、対象となる事態が atelicな場合には、この必然的とされる「対照のimperfecto」が pretéritoに取って代られることがある。これは atelicな事態の持つ特殊性、つまり、atelic事態の imperfectoはその pretéritoの表出内容を前提にするということに起因すると考えられる。

以上のことは、少なくとも「対照のimperfecto」というimperfectoの用法の解釈に関する限り、pretéritoと imperfectoをアスペクトというカテゴリーにおける最小対と見做すアスペクト説よりは、これら二形式を最小対と見做すことなく、imperfectoは presente と機能的に平行した関係にあるものと考える時間関係説の方が有効であることを示すものである。

注

* 本稿は日本イスパニヤ学会第４２回大会（1996年10月19日，於神奈川大学）において「canté形，cantaba形と時間的限定性」という題目で発表した内容の一部に大幅な加筆・修正を加えたものである。

1) アスペクト説の中には図１とは異なる枠組みに従うものがある。その代表的なものとしては RAE(1973)のように、動詞パラダイム全体を「完了アスペクト」と「不完了アスペクト」に分ける説を挙げることができる。この説に従うならば、「完了アスペクト」には全複合形と pretérito が、また、「不完了アスペクト」には pretérito 以外のすべての単純形が属すことになる。

2) Cfr. 山村(1996a) pp.115-117.

3) 特定の期間をめぐる telic な事態(a.)と atelic な事態(b.)の違いは次のように

共起する副詞句の違いとなって現れる。

a. María escribió una carta *en dos horas.* マリアは２時間で一通の手紙を
「書く」のpret. ひとつの 手紙 2時間で 書いた。

b. María vivió en Japón *dos años.* マリアは２年日本に住んだ。
「住む」のpret. に 日本 2年

4) imperfecto と期間の副詞句との共起の可能性には、当該副詞句が前置詞を介したものであるか否か、また、文頭に置かれているか否か等、様々な問題が関係してくる。この点からみても、imperfecto の出現を単に当該事態の時間的限定性の欠如に起因させようとする見方には問題があると言わざるをえない。

5) 資料体の中で antes と共起した「対照の imperfecto」用法のうち atelic な事態を対象としたものは17例、telic な事態を対象としたものは3例だった。

6) インフォーマントの構成はスペイン出身者が３名、キューバ出身者が１名である。

7) Ａタイプの質問項目は以下の通り。選択肢はimperfecto/pretéritoの順に並べられている。

① Usted tiene un coche maravilloso, ¿ no ? --- Lo tenía/tuve pero se lo vendí a un amigo.
あなたは素晴らしい車を持っていますね。持っていましたが友達に売りました。

② Tu marido se levanta muy temprano, ¿ no ? ---Se levantaba/levantó temprano, pero ahora...
君のご主人は早く起きるね。早く起きてましたが、今は...

③ Usted sabe muy bien japonés, ¿ no ? --- Lo sabía/supe, pero ahora...
あなたは日本語をよくご存じですよね。知っていましたけれど、今は...

④ Usted habla muy bien el japonés, ¿ no ? --- Lo hablaba/hablé bien, pero ahora...
あなたは日本語をとても上手くお話しになりますね。うまく話していましたが、今は...

⑤ José tiene muchos amigos, ¿ no ? --- Tenía/Tuvo muchos, pero ahora...
ホセはたくさん友達を持ってますよね。たくさん持ってましたけど、今は...

⑥ Juan siempre llega tarde, ¿ no ? --- Llegaba/Llegó tarde, pero ahora no.
フアンはいつも遅刻しますね。遅刻してましたけど、今は遅刻しません。

⑦ María es la novia de José, ¿ no ? --- Lo era/fue, pero ahora no.
マリアはホセの恋人ですね。恋人だったけど、今はそうではない。

8) Ｂタイプの質問項目は以下のとおり。選択肢は imeprfecto/pretérito の順。

① Ahora vivo en Madrid, pero antes vivía/viví en Barcelona.

今私はマドリードに住んでいますが、以前はバルセローナに住んでいました。

② Ahora tengo un coche, pero antes no tenía/tuve ninguno.
今私は車を持っていますが、以前は一台も持っていませんでした。

③ Ahora María habla muy bien el japonés, pero antes lo hablaba/habló muy mal.
今マリアは日本語をとても上手く話しますが、以前はとても下手に話していました。

④ Ahora sé algo de español, pero antes no sabía/supe nada.
今私はいくぶんスペイン語を知っていますが、以前は何も知りませんでした。

⑤ Ahora María es muy buena, pero antes era/fue muy mala.
今マリアはとてもいい子ですが、以前はとても悪い子でした。

⑥ Ahora José llega puntual, pero antes llegaba/llegó muy tarde.
今ホセは時間どおりにやって来ますが、以前は大変遅刻していました。

⑦ Ahora es adulta, pero antes era/fue niña.
今彼女は大人ですが、以前は子供でした。

9) Aタイプ、Bタイプの各質問に対する回答は次のとおり。スラッシュの左の数字は imperfecto、右の数字は pretérito を選択したインフォーマントの数を示す。

A ①○3△1/○2△2, ②○4/×3△1, ③○4/△3×1, ④○4/△3×1, ⑤○4/△3○1, ⑥○4/×3△1, ⑦○3×1/○2△2

B ①○4/△4, ②○4/△3×1, ③○4/△3×1, ④○4/×3△1, ⑤○4/△4, ⑥○4/×3△1, ⑦○3△1/○2△2

10) この回答者は ser を用いたA⑦の質問に対して imperfectoを×とし pretéritoの方を○と判定していた。また、同じく ser を用いたB⑦に対しても imperfecto の方を△とし pretéritoの方を○と判定していた。しかし、これら二問と同様に ser を用いているにも拘らず、B⑤については imperfecto を○とし pretérito の方を△にしている。また、同回答者は tenerを用いた事態に対しても揺れを見せ、A①では imperfecto を△としているが、A⑤とB②では imperfectoの方を○としている。なお、この回答者も telic な事態については、いずれの場合にも imperfectoをより適切な形式と判定し pretérito は no-aceptable としている。

11) Cfr. 山村(1996a) pp.123-125.

12) スペイン語時制体系の詳しい研究史は西川(1988)を参照されたい。

13) Cfr. Rojo(1974) p.73, p.74.

14) pretérito によって表出されない事態については山村(1996b)を参照されたい。

15) Cfr. 山村(1996a) pp.114-117.

16) スペイン語には当該事態が展開中のことを示すものとして 'estar + 現在分詞' から成る迂言形式が存在する。この形式によって表される展開中の事態と presente によって表されるそれとの違いは大いに検討すべき課題であるが今回は扱わない。

17) 本稿が「属性」と呼ぶ解釈は従来「習慣」と呼ばれてきたものに相当するだろう。しかし、この用語は次の理由から適切ではないと考える。まず、「習慣」という用語は当該事態の主語あるいは主体となるものを意志を持つ有生物に限定する可能性がある。また、「習慣」という用語を用いると当該事態の反復性の有無が必ず問題となってくるが、本稿(1.1.)でも述べたように、当該事態の反復性だけを問題とするならばこの「習慣」という解釈は presente, imperfectoのみならず pretérito においても可能であり、presente, imperfectoに特有のものとは言えなくなってしまう。しかし、同じ反復された事態に対する presente/imperfecto と pretérito の意味するところを観察してみると、前者はそれを当該事態の主語の「属性」として表すのに対し、後者はそれをその主語が関与して成立した「出来事」として提示するという違いがあることが分かる。そこで本稿では従来用いられてきた「習慣」という用語は用いずに「属性」という語を新たに採用することにした。

18) もし 26)の前半部分の付加疑問文が当該人物の発話時における属性を正しく述べているのであれば、答える方はそれを肯定するような返事を返すだけでよいだろう。しかし、その返答が26)の後半部分のように presenteで表された当該人物の属性を imperfectoの形式に転換したものの場合、それが表すのは、付加疑問文で提示された当該人物の属性は発話時とは異なる過去時に属すということであり、結局、この当該属性の属す基準時のギャップが当該属性の発話時における無効性を間接的に示唆することになると思われる。

19) atelic事態を対象とした場合の imperfectoとpretéritoの置換の問題についてはまだ検討すべき点が多々残っている。例えば、今回実施したインフォーマント調査の結果によれば、同じ atelicな事態でも置換の可能性は事態ごとに異なっており、特に、pretéritoの否定文が imperfectoの代わりになる可能性は極めて低い。このような事実は、本稿の主張だけではまだこの問題は十分に解決されないことを示すものである。

20) この解釈は当該事態が既定の過去時において展開中である場合のものである。

21) これと同じズレは、例えば日本語で「君のご主人は早起きだね。」と言ったのに対し、相手から「早く起きました。 でも...」と答えられた場合にも感じられるであろう。それは「早起きだ」という文が当該人物の属性を示すのに対し、「早く起きた」という文は当該人物の行為（＝出来事）を示しているからである。もし、この行為の文「早く起きた」を過去の属性を表す「早起きだった」という文に変えれば、このズレはうまく解消されると思われる。

参考文献

Butt, J.& Benjamin, C.(1994): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Edward Arnold.

Porto Dapena, J.A.(1989): *Tiempos y formas no personales del verbo*, Arco/Libro, S.A., Madrid.

Real Academia Española (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.

Rojo, G.(1974): " La temporalidad verbal en español ", *Verba* 1, 68-149, Universidade de Santiago de Compostela.

----- (1988): " Temporalidad y aspecto en el verbo español ", *Lingüística Española Actual*, 195-216.

----- (1991): " Relaciones entre temporalidad y aspecto en el verbo español" *Tiempo y aspecto en español* editado por Bosque, I., 17-43, Cátedra, Madrid.

西川喬(1988):『スペイン語時制研究史』 神戸市立外国語大学外国語研究所

山村ひろみ(1994):「複文における indefinido と imperfecto ー過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察」, *HISPANICA* 38, 120-135.

----- (1996a):「canté と事行の時間構造」『獨佛文學研究』第46号, 113-133, 九州大学独仏文学研究会

----- (1996b 印刷中):「canté/cantabaのアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」 *HISPANICA* 40